

## 人生の野蠻な時代の誘惑

人生の野蠻な時代の大通りをゆく  
妖聲にからんで

虚榮は

三日の鼻柱にぶつつかる

世よ 白り腰を

もう 大股まひまくり上げなくとも

足飾りの魅力は 恥を 恥を 壓へる

短リスカートに 裾がまくる 突風に

涙を潰おさえて

鼻を拭いて行く

恥は 野に誘惑される



女

林檎を握つて

私は血を吐いた

血は林檎の面々する

林檎を掬つてしまつた

なまぐさり血は胸を塞いで

血は黒く凝結した

握り

吐息を切り取る

女の姿は――

影像にふれて青春の薄れゆくを  
観る







地の響音

深夜に気事は地響を

あゝ 神経衰弱症を深めた

雙腕を額に來也る

須臾に一時減ずる雲の吐息を

真里友天井に投げ

死の誘惑に耳を傾けける

心の死骸 助

浮揚せる病人林

深呼吸の為の一瞬

心の一角に在る死の流星を觀了



病々て

二時に疲勞を耐へる

くるーりー！

瞳孔に白熱の業の龍りを壓へ

進みり車の馬蹄は三時をうつ

宿木方のか！

四時の窓が薄ぼんやりと覗き入る

あゝ あゝ

心臓の間に腕を宛く



# 女地極

春陽に昇る来る馬車

車足を追ふて大道に散る

悲鳴の花

復た遙かに馳走し来る白鳥車に――

現実の陰影よ

瞳れを張り擴げ

氷塊を纏ひ

春を惹ひる

私の理性は

虚空に身を飛翔を起こす



陰鬱な小屋

やさきも 赤き花も

蒼空の深さに

四ノ脚を踏み張り屋敷を~~延~~伸はす犬

猫の陽当りに雙の瞳を細めし一場こそ

櫃を破つて心を断つ

我が胸に満ちたる嘆き

灰塗の屋根裏に

陰鬱な心の破片を緝めて合せし

さみじ 糸は

糸を

春は掃きぬす



卵

ユカリの先端に迫まうた  
春は健康を裏手に描く

今日も三羽の鶏が卵を生んだ

私は靴の紐を堅く締め直して

頭上には帽子

左手にはステッキ

右手は卵

さて

心の裡で  
私の卵は孵化するぞ、



初巻

腸裡に黄金を隠かし  
 胸に一株の小松を植へて

来る朝 白く宵

樹下に数々の境々を注ぎ掛けたが、

春重横に菊の夜

細女は乳浸るる櫻花と化れた

私は未だ見たる湖心に散る彼女の姿を恋り  
 暑師の所で追うてゐた

今又身の感慨と波と場に流れて

路傍に膝を崩して

電柱の柵に衣浪の痕本を題して



孤獨

子供等が騒いでる

私は幼時  
子供の頃  
にスキーに  
なんび見たことも

ない

スキーに

向ふ側の娘も走りに来た

一番青の  
高りの高り男の兒と  
ありスエタの娘は

どう見ても兄妹

おの子等の親達になつて  
みえは！

私は偏り路を歩いてみる



# 人生行路

黒土のかほり、刀鋸の先端にむく木

馬の尻を鞭打つ男が汗を拭いてゐる

蒼蒼に喰ひ入つた母が

襦袢の上に逢か三つゆかり

私は幼い頃

筒袖で水臍を拭き乍ら懐柔を託んだ

或る晩春 母はあきれたしきりた

「まあ、唇は紫色に、顔へこみ、口

復た、水を浴びてくちあふ」

母は親子と私を見据へてゐた。

「ほう、板だ、うんと押すんだ」

大八車を挽く祖父の先頭がありあり見へる

ユーカーリ樹の葉をまた小足の背後に

子炭達や群鶏の騒がしき声は、



No. \_\_\_\_\_

女の百姓の顔色は随分錆びてゐるやうだ



4じめ方者

鷹竿の先端に突き刺さる  
満月が空に割れた

矢つ張

彼は詩をうたうた

私は4じめ過ぎる労働者になりか





人生無道

都會と春の十字路に

あつた女物 肉体的な一

お木は ひう

私は陽氣な情念を買つてみた

その流轉

人への集團生活の軌跡

不考駭羅な性慾爆発者が繁殖した

黒、黄金、赤絹の髪

無邪氣に爆発を常態とする

悪疾 情慾が燃へ盛り

光熱素が陽之に燃え溢す

私はこの空氣に生きあはならぬ

俺は性慾を貯蓄した人だ けれど

理の住居を



幸福と道徳の調合液を

併し

今は

力の

~~反~~

作用

が

未道直下の氷山のやうに

――

私はいく人生無道」の本質に馳せしやうとする



## 冬の世

感謝する、ヤミにー、

力に富む者は、可能の神を憎恨に刻む

私は群が木で葉を雪風に送らう

歡喜にあひるものは、恥に惨憺の巨火を

負きものは

大地を踏み、地にも心を慰めさる

私は新うーき水流を素直

世は冬の中

心は偽つて、忍の美德を浴びる

寒さに人は戦く意志を奪はれ

労働の宵に、寒と怨念を重なるほろぬに、踊と木より、体を汗と埃りに放り

入る

そうた

私は憶おた



No. \_\_\_\_\_

破  
靴  
を  
抱  
り  
こ  
き  
を  
つ  
つ  
こ  
こ





斗顔

朝

酒杯の口も西窓に掛ける

秋は閑達に書か

る日もある

霜風に希望を鍾る木々を想う月を観る





穀類

九重島の古く荒々

クリスとの話は性の萌芽を授け

新は居睡りに誘はれながら

生過り鮮心地を

反響音に響きあひ





太陽を奪ひ去る今迄

靴先の破れた横濱を却會の朝に曝す

露のパンチに水鼻をかみ先頭

人回が今日に抹殺される

三浦記事の口服の群が

人道から逸昇した

白雲のくすみの朝日をもろろある

あふも あふも あふも

私のアガニ色の頼骨を岸の靱じ抱りある

私は至人が街頭に

手裏剣を投げた横に這ってやうか

また

驚天爆の煙幕が白雲の太陽を奪ひ去る



悪の華

和は酔つてゐる

ワハ　　リ　　メ　　ハ　　ハ

なむ　　嗟つて　　~~あ~~　　リ　　け　　な　　リ

叔母であらうと　　賭博場であらうと

妻の吐息を踏みにしつて

両手で女の脚を追ふ

未だ　　未だ　　女の姿に達しなリ

もつと増恨の嗤で侮蔑しやえ

~~復た~~　　復た　　酒杯を傾えける



里邸に病む

三月の風邪を壊して

呪われた心臓の鼓動を慰めやう

也めゝ 幻想の裡に家を建てやう

車上りの日に故郷を祈りを聴きたく

汗になつた寝回着を捨て

儼し身を過めやう

何處からか ときどき

哀愁よ

昨日の望遠鏡を月に覗かやうか

瘡をたぬのときめきに耐へ兼ねて

我にもなく 記憶の手を握る



## 破れ鏡

悪魔よ 俺を責めるのか

三軒の夢甚に鏡の裏に削り落した。

だから、現実に破れた姿を鑑みて

追憶の域を築くのだ

築

いつ迄も野牛は野草を食つてゐる

暫く 私は夢を見る





## 朝の散歩と橋名

日和に友人 小鳥の聲に

露を拾ふ朝の

情熱は還つてく 胸腹をくぐり

昨夜の女は影で通る

明眸よ 何處に足を伸ばしてゐる

頬に 口元に

眩暈がする

ちようきんな道になる

頸條に 腰に 股に

露を拾ふ朝の よろめきを

女あ 女あ

心を

大陽が深紅に熟木を登つて来る



夏も越える

暑氣が鐵橋の影に没ちあれて

幾條もの陽光が草葉に泳よひてゐる

眠さうてゐる空が時折目醒めには浮いて来  
る

蟻とたんぽぽの花に守もうた別荘で

私は夏を忘れた





子供心

たうけた犬は長い舌を白白に曝れて  
白壁が饒けてゐる

子供の心は

水泳から歸つて

とろけた瞳れを鼻に掛けてゐる

追憶が十年も溯つて

どんな近視眼鏡だつて間に合ふ

勤勞の若さや

問へてゐる



齒痛

齒が痛む

頬杖ついて寝しり日が暮れる

薄くうがりに母の姿が懐かしく揺る

露を蔽ったばかりの懐憶に

し水みりと歯痛に耐わす



# 一本の道

苦悩の驢馬に乗つて喘いでゐる

大陽が脊骨を刺すやうに

砂塵が心臓を蝕むやうに

塞

一本の路は陽炎に閉ざされてゐる

私は人生砂漠の行路病者で

頭眩はよく乾いてゐる。



炎の口

熱気が燃へ盛る

乙女の瞳とに

生命力が炎へ盛る

女の心を懐いて

私は人生の険阻を制して登る





人の砂漠

海に衣を飾りて第一の夏の  
淫蕩がはたあつた

人の砂漠に

サボテンの葉が棘を擦りして笑ふ

都會の人よ

ゲラ ゲラ ゲラ

舟は月夜の蝙蝠のやう

夏涼々に夢をぬいてゆく



## 苦一斗

なまくろを擽り合ふ事  
火花を  
破小舎で理想が創造つて居る

勞働者はいつ迄も働かぬばぬ

軀を切り碎しても生活難は離れず

メキガに悶ゆる世のやうに

私は頭髪を擽る。

髪を擽る。



和

生気が湧く

胃袋はカスカスで

馬鹿ッ！

ケツチンには誰をもなり

和は里賢の電玩に手を伸ばす





朝

金魚の水もかへた

戀のなりあひを撫でながら

阿片の酒で酔ひ死にた

と眼鏡をはづす

生死の境にまぼしり太陽は

さあ 皆なで方けなす

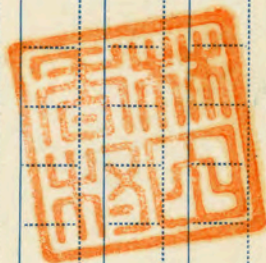
何のインキが ペンも

ハイ ~~ヤ~~やうなうと夢で

今朝の太陽は滅方に鋭

夜舟の裡で

洗濯貝のやうな欠伸をする





香烟の夢

カナリヤは太陽の子になつて謳ふ

女は基督に――

俺は菩提樹の根から這へ出た釋加だ

猫が背伸びをする

月になつ

月に

猫の瞳が太陽の子を狙ふ

早く ~~ぬ~~ 然の救ひに

女よ

今宵 瞳めて妥協せんとする



悩む限り

神を疑フてゐる男が

神祕にソレを想ひ悩んだ

もしやもりを得たなら

其日

太陽は西から登る

併し

変は~~神~~奇態の神である

時~~は~~どる思議な神祕はなり

女は頬のまのやうに熟れた神性を

節なく横へた

男は海<sup>うみ</sup>の唇を噛みしめてゐる



## 衰滅の苦

秋の残夢に西日は轉ひぬる  
息つく笑顔を憶ひながら

開けつ放しの人生から  
乙女が二人歩き去る

空を見れば心の奥  
かなたは遠く霞んでゐる

氷にたうと睡つてゐたり  
思ひに合掌して



## 夢の女

森の小路にせはスタスタ

貝之なくなる頃夜ふりかへる

にくと~~寝~~<sup>現</sup>れだ瞳がー

どうしたとりあのだ

二年某 不思議な夢を見續ける

働き疲れ

無聊に悩む稲毛地に

讀書も倦き果した。

夜を待つ者~~は~~<sup>は</sup>奇蹟を信じ

復た見ると 夢をなつかし



廿四才の生

夕風に赤雲を駕せ

やどかりは這て出す

併し塵り世間を持ちあへる

何もあらず珍うーさ

二十四才は暮れやうものを

てこぼこの岩に腰を据へ

ふつそり掌の線を眺る

岩に寝て

身をかもめにやためる

藻葉は汐を待つ

すつと岩目を抜け通る

怪奇な宵風に

二十四才は暮れやうとする



## 放浪の移民

冬空に寂しさを見舞ふ宵

衣木友人田上と頼みする

誰れでも苦しい時には  
あゝ

金か嗤笑してゐるやう

雨に寒さが運こばれて

茫然した野心がいつの日にか流された

人目味か豊たかに角がとれると

微細なものでも偉大に映る

赤は夏赤に

白は純白で

平凡は素晴らしい幸福に

誰れか夜中の相談相手が欲しい

かう

拭擦の皮を剥いてみると

調和した静寂に

若し焦燥が透明な空気に溶けていってゆく



破子の破片にも注視は燃へ  
 汚點の染んだ壁にも受着は微笑す

何もかも うんうん

合點してやりたり

優し心加疼りゝる

雨音の ホーン ホーン

謠言のやうに軒を降りる

私は魔睡劑の後の放心状態に

幸福の縁感も楕圓形の莖にす

紅木ど 冬傘は

稚民放浪の ~~秘傳~~ 秘傳をふかす



雨の音に

雨の音に光々がある

沸ーリ裡の憂鬱が時計を踏み破り

微笑笑々金に刺さる

雫の中に夢美々

雲を散った夢音々

流れに花を揺す時

僕もゆが走ーリ



胸の燈火

ね

燈火なき胸にほのめく影は

何を悲しうき爆音が

俺は何を願おう

道路を急ぐ足元に

虫を送る

大きな蔭は何物か

軽ソ羽毛で抱お心に

暗氷を張り詰めるは

本能の喘ぎか

何處に迷ふ俺たか

只生活の細道に

踏みで起る本能の重壓

迷に度たさぬばかりめか

意に俺は迷わうてゐる



空気に誓ふ

生れかあると

俺に問ふのか

水とパンで生きてゆく――

幸福が

女々 空気に誓ふ祈りより

汗の垢程 ~~汗~~ 汗 過かたろ

眠りに爰も

足に真実を

今日と日ふりか

生れかあるといふことも

吐息の中に指し出す



## 想急

今朝

椰子の葉にくすぐられる窓を覗いた

カサ カサ カサ

尖った破れ葉は小雀を驚て

カサ カサ カサ

暁陽に窓を開かせる

或る朝の情景が物を敲く

小雀は女に

カサ カサ カサ

子供心と乙女恋しさへ

はらばらと空を仰ぎ斗る



## 新年

瘦れた話を毎夜の鐘にして  
刀を食ひる

茶碗の御喜にスツキリと顔は暗れ

元朝は明候を~~新~~過ぐる憶ひ

畫

新しく一斗計畫に物を温め

暖一杯に新生をみふ

心に太陽を握へ

数々の新りを世帯へる



冬と秋と

闇と枕と息に

冬は夜を収ふ

両脚を揃へて親指が

時計の音律を指揮する

タツク      ケツク      カツク

夢の行進曲に女を収め

朝は七時に拍手する



春は若く

蒼空<sup>ニ</sup>心

悠遠<sup>ニ</sup>志

微風<sup>ノ</sup>うわり

春<sup>ノ</sup>節は人生を嫉妬する

素情<sup>ニ</sup>揺れる若やかさ

歩<sup>ミ</sup>明<sup>ニ</sup>に轉<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>面<sup>シ</sup>白<sup>ク</sup>

頼<sup>ミ</sup>笑<sup>ハ</sup>あ<sup>ン</sup>か

友<sup>ト</sup>友<sup>ト</sup>

身を醫<sup>ハ</sup>おし<sup>て</sup>迫<sup>リ</sup>

大<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>用<sup>ケ</sup>て<sup>は</sup>始<sup>メ</sup>の春<sup>ニ</sup>

あ<sup>ン</sup>微<sup>ニ</sup>笑<sup>ハ</sup>あ<sup>ン</sup>か<sup>ナ</sup>



或る夜

或る夜

女に愉悅を吐く

憶ふを葡萄酒に浸した

いつしうす

母の姿

たふ たふ と揺れ

酔ひ身を白き寝臺に伏せしむ



女に言ふ

阿呆よ

葡萄酒の罎に

我は鳥

天地を縫ふ里糸に苛なまれ

僅かに汗を拭く

血を焦がし

瞳を飢えめする

夜浪の骸骨

恋に絲茶の香を奪はは木

陰を啓き

咽を賣る

陽性の契を黒天に吊るす

我は鳥

生くゝからうとすとは



塵土 幹は妖女に媚られ  
女よ

萌芽は錆びて塵埃に等しいか  
毒を盛る

生駒を繋する道に

砂を撒け

炎熱に轉々する放浪児に

枕木のやうな毒草心

海養ふやない恵を喰ひ

歪んだ幸福も陽走に曝くす生温い生活に  
腐れた妄想の襤褸を出すわう

け馬車のやうな男に揺る木

長い旅路に受胎を反芻する

女よ

額に手を当てた片に

埃が媚て咽喉の爛木やう

悔恨と逆上



枯草が喰つて水を喰けよと

夢の追憶が不思議な業を

佛の邊にいて拜みながら

併し 日暮れて明るゝ路はたり

蒼白の月に星の蔭影を索かれ

地上にさす

お前だ

さあ 寝向きの袖で唇を噛むかより



## 針の暮れ

電燈を巡る線香のしんがり  
 寄り掛った脇に眼瞼を掩ふ

如何なる慰安も足りなり

雲に駕つた脳干に命を待つやう

眩暈と絶望に珠数を擦り合す

咽<sup>ア</sup>不<sup>フ</sup>白<sup>ハク</sup>木<sup>キ</sup>也<sup>ヤ</sup> 酷な吐息で静寂は追越し

心は葡萄酒に慈悲の一滴を吸ふ

雪の降りしきる針末に  
 年暮れに

針木も泣き止む  
 うき世はたうが



秋の女

彼女は瞳をわくわくした  
秋は恥づかしい寂しさで

山美顔に何時迄秘めて恋を抱く

せよ八月 そと秋

雲雀の舞の上る朝

たうた一夜の雨に城の石入る空は

時々と春になる





祝福

安協に

雲も風も 太陽もにやうう

地との祝福

水の精

火の魂

結婚の宴に列なす

列





秋は眠きたり

犬の齒を舐

兒を抱きた黒人夫婦

黒鳥の草根の奥に散るす

樹上に雀は群れて微音を誘ふ

微音を誘ふ

小をみち柳子を背に秋は睡ふ

故郷に送ふ

母に送ふ 一人に

とうとう移民放浪の子に

さて

明日は所詮明日で

足を投げ出して焦點を拂ふ



猫

キリ キリ キリ

キリ キリ キリ

ミルウ四を抱へて縁を降りる

木葉が頬を撫で落ちる

猫は何處に行つたんだ



No. \_\_\_\_\_



# 菊の花

彼女の胸の菊の花を  
描き

想念に血を沸き立たせ  
たか

庭の隅に降りてゆく

この花が この花が

掌に握んだ花を一枚一枚  
抜き捨てる





純潔

砂糖を舐めるも

塩も 事<sup>こと</sup>も

どうも悪の破城

純潔は幸福を齎<sup>もたら</sup>うため

枕木になつて埋<sup>く</sup>やく労働者の男骨に

ああー

力無き者に自由を與へに



表

室の真中にあぐろをかきこ

カードを繰る

カードは狂フてゐる

キンクは

一ニ三四五六七八九十

チャツキモ

フ フ フ フ フ

ハートの女王は何處にゐる





牽傭空虚

手入

腕入

虚空に働く

時計は冷静に現在を追ふ

人形を置く  
花を飾る

私は幻を描く

（夢世に）

~~夢世に~~ 今夜も二つ枕を重ねて寝る



何處に行く

魂が

雁になつて飛んで去る

北はつめたい國

復と歸り来ぬ

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

俺も人間だ

心気な女だつ

闇夜 寒空に

身がこつとする



## 一本の線

虚空に一本の線を描く

日向に保護された我が潜在意識

絶へずの努力で飛ひつかうとする

しかし

線は虚空に描かれた

一個、或る器なく

はたし心算盤をうごかす

哀れなうたうは我が夢である

人生を横切った幻の架空線に

復もや足は大地を離れやうとする



印鑑

水晶に印を彫る

印は心、一つ 我の表現

今 印鑑を壊し

朱肉を棄てんとする

虚偽な社会への最後の謝禮を捧げる

人は三つの心を持つ

社会は三つの表現を許す

嘘と真実と其の辯解の

あるあるが偽の人生を傷つけた

私は其の印鑑を捨てやうとする



退屈な夕伸

疲勞した女は

大股にも布を挟はさんで仰面へに眠ねる

あやがばあ

死よりも退屈な倦意けんいに夕伸をて手で防かぐ





血の想ひ

水山畑に窪り靴を<sup>引</sup>掛ける

枯草に繫がつて寄り水山が幾度も轉が<sup>つて</sup>ゐる

秋分憂鬱な表情に窪なり

秋陽に無愛相な沈黙を<sup>ま</sup>ねる

エイワと

大きなのを目掛けて足<sup>跡</sup>にする

私は錯裂した赤き塊片に<sup>映</sup>目<sup>れ</sup>る



写真

すかーと見ると接吻のあとがある

口唇に口唇を重ねる

晝の頬突んだ顔に

夢のやうだが

にふりぬ陽が感傷心を懐暖する





散歩するやうに

ゆづくりあまこゝ

雨が降つた軒に

庭木たろ木蔭に

淋しかつた手を握りませう

あだし遠の人生は長いから

もねとゆづくり散歩でもするやうに

さあ

左の足を揃へて歩みまよう





この心

湯の中心唄ふこの素持ちを  
賛美歌で感謝するあの気分

老の感激に吸り込まれたらう  
隣りの犬にも聲を掛けちゃろう

私は陽措の温さに肩を浸たててゐる

顎に掛けた湯波斗に揺かたきになつてゐる





## 解剖

糸の瞳孔はメスの先端に、<sup>ミ</sup>極光りを投げてゐる

ハリハリと襪襪を裂く聲音ハハ

黄色蠟人形の肌を切り開く

凍木の人形は、<sup>ハキリ</sup>襪を仰向けにせり、死体に張り詰めゐる

脈管<sup>カ</sup>うづかす、<sup>カ</sup>臓腑に

一滴の流血も見ず

一味の恐怖も

蒼ざめた感慨も吐息の軋に沈没して、<sup>カ</sup>傷跡

只、<sup>カ</sup>好奇心が茫然と聖燈の鈍り影を浴びて、<sup>カ</sup>佇んでゐる

肋骨を折り頸に、<sup>カ</sup>あ

あゝと、<sup>カ</sup>鬱血を継続した心臓から、<sup>カ</sup>刺し

あ

羊羔美色の肺を



船になつた胃袋を括り付けた白布ひき  
り出す

ゴボリゴボリ  
可憐なハハバ  
41ンナオ

夕一を飯まんか  
執刀醫の微笑が窓一杯に崩れ落ちる

ニシンの卵を握り出す 水漬

水漬に注視を放つ  
ハート型に繋ぎあつた蔬菜子のやうな肝臓

に心を奪はれる  
瘰癧子  
けいれんを起した

縦断した下腹部に理性の  
うう とうきりり  
腹筋を

陰毛がぬれぬれに切開面から腸に露出する  
ある

神お人霊は何處に迷つてゐるだろう

玉葱の皮を剥ぐやうに

瞳にしみぬ涙を拭殺して首を傾けてゐる

無残の死面に黙禱を捧げた



## コケの花

いつもバナ、の葉が大陽を奪つてみた  
其の許に

冬の葉にて取れた水でゆとりたり  
咲りてみ

和は今 弱きものゝ強さを知る

身をふせりだバナナ葉の破れ目に

夜な夜な白り落板を立て掛け

月を呼んでみる

亦も和は

しほろしいものゝ唯一の希望を見る

心に流れたる白光が

いんなに尊いか

コケは白板を傳へて

大空に放心してゐる



## 鼠色の空

鼠色の空に

今冬の宵が動人<sup>くろが</sup>である

旗竿から降りて来る雲に

青りばんち父露になり

女が一人

池のほとりを歩くとゆく

通園

池の周囲を彷徨する





船出

船窓の圓に

横顔を反映しながら

夕陽にさうなうと

ますとの上に鷗をおりて

女は軽く鎖骨鎖骨をのぞいた

船の動きに

圓窓に報く

美しい微笑が

白り半帛を打ち揺る

見送り人の群から茶色の帽子を引き抜いた



## 手術室

患者の呻き聲に赤十字徽の時計の流転を浴  
びせる

暖目

ピン　メスの傷き手を奪ひ

血が白布に浸潤する

無言

一区の頬に五個の白衣が顔面神経を硬直さ  
す

喘息が天井を傳ふ隙に流る半臂の扉に馳  
也出る

患者の各部に凝集する沈黙に

懾斗が白壁に突如あたり

呻吟の裡に魂が冪へ失はる

やがて弛斗の掌に汗を乾し

唾液が咽喉を通過する



## 放浪の闇

何故に悠るも彼女を惹くのか

冷水に咽喉を慰やし乍ら

いやな夜だ

無慈悲な世の手摺りに投げ込まれし素心を

失つてしまつた

ああ、新鮮な酸素が流れこ来なりが

怒濤だ 引力だ

鉛山 鉛を舐めちぎつた慾念を翻弄する女

あの笑窪が

口元に小憎いほくろが二つもある

水戸のやうに人生を投げ捨てやうか

意も慾も

總てを鷲掴みにして

俺は、放浪の闇、裡に



煌めく海

ト ト ト ト ト

ト ト ト ト ト

雲に云そんな空に對應して

海潮が白髪を振り翳す

~~翳す~~ 翳す

ほう ほう ほう ほう

は は は は は

櫻橋の蔭から

まき

赤い白の髪が 並んで海面にうねる

悩 まーり

悩 ましり

煌めく海

砂をあがった俺をどうする



海の心

浦に接すおう木て海の氣に酔ふ

砂に取せば

心に過港港が起る

馳驅する金太

海に走木

海に飛ぶ込め

倭は櫻身

海も一人

今日ゆつくり砂を踏む海太

倭の足をその海白り

もつともつと洗つて呉れ





## 苦悶の劇

洗濯と観劇の生命でもあつたか

曰曜毎にひしりひしり

汚れ着の石鹸の泡に顔の汗を流し込んで

ると

泣きたくて泣きたくて

辛村に泪が眼鏡を包む

人に見るべくなり生活苦の惨劇は

聲の出し寂寥以上に

眼に見へぬ釘を胸に打ち込む

透りたる惨状を破つて

夜はふるかに観劇に

併し

瞳に投じた女優の大股の感激は

眠いつ知らずに帰途を要した寂寥に奪はれ

自己の姿が闇に打ち顛る



足

電車の裡で春は狂ふ  
二本の足が瞳にこけり付いた

海も 山も 野も

本能がう肉感を遠慮してゐるのに  
獅子の頭のやうに

十字斬は瞳孔を宙に釣り上げる

葉へ 鬼弄の指をさす

神の恵靈を

性慾の妄念がわくわくと逆立する

美も 醜も

善も 悪も

さあ人間お

問答の裡では何にも観えな



## 熱意

美の貌と

色彩を嘆美する女

女々秋の情緒にほだされ

うろろろしさを大地を滑りして行く

何と熱湯の憂鬱だ

纏ゆる衣装をかなぐり捨て

現実の囁にしがみつい左儘

真裸体で恋をしやうと上気してゐる

美的にこれがいー

女

女の頬に涙散らす

扶橋の薫りが

くんくん心を攫つてゆく



異國の秋

この四行

四行

ふと立ちひまつて

肩を並べて道を通する

異國人の横顔を凝視した

やつぱりソレなり

故郷とは似ても似つかぬ

夕焼の感傷に

黙々と歩く放浪の秋の宵

日本

日本

日本

故郷に憶をよせ乍ら

乱れ歩調に

もどかしり外国語を交し  
甘ねる煙草を

煙草の輪につくりあうを押し  
伏せ

無理に開きし幻想の袋を

其儘

並んで歩く白指人の顔色に左左をつける



夜の海の哀愁

吠之 叫び

空腹な獅子となり荒れ狂ひし海面も

青蠟に煌めく月を駕也

艶

夜の哀愁に砂を傳ふ

睡未ぬ夢の霜きに這ち出でし一人に

慰み慰みの叫び聲を

遠き遙かの海線上からかけこ来る



されど

ためらふ彷徨く足音が

さくさくと ~~海~~ 木了砂に残を措きゆく

涯



## 狂想

秋は散亂しさうな狂想を持つ

移民放浪児の一人行所の迷ひ路に跪坐す

は

濠一り耳鳴

脳漿を震駭せ

自然も身も

危殆ろしき死曲の裡に引き摺り込まれる

大鼓が鳴つて来た

琵琶の音が――

にヤノに轉ずる

破  
新木るやうなヤツに

嫉妬に如てゐるかの如く沸々と狂想が脳

髓に足踏みをす

大粒の雪になつて墜落する肉体の凍りきつ

た悶へ轉るかりに

現実が  
あま  
蒸し  
金貨の  
重霞にな

よる  
めり  
た  
あ  
み  
を



No. \_\_\_\_\_

私は死の怖ろ

しみは死の恐ろしさを  
はなすためたうか





口唇

女の口唇は深紅の縞を描き残してゐる  
 (縦)

女は春風になんといつてを挟んでゐる

白砂が男の筋骨にたわわたる頃

女はすやすやと海岸の夢に黒髪を流す

街路を降りて砂に迫りし熱氣を

女は冷い顔で防ぐ

西川 西川

男の瞳に燃え移つた炎熱が弱められ

西川をかぶりし口一杯に

赤い滴りが寒涼な砂に浸す

此處にも幸福の神が雄渾な姿で自然を

征服してゐる



接吻

海の波の音か

砂の舞臺に

あふたけの情熱に

太陽を脊中に数回しなす

あふあふと眼の輝きに踊り込

(涙を)

時折り瞳を奪げて微かに感謝する



涙を押し除け、童々と座敷を奪った砂原は  
 笑上する熱気に接吻をする



## 夜の波

夜を戴ソた街頭に足を運ぶ

脂肪の香を浴びて

今宵は静寂な波に揺る

艶々しい夜の表情に

ふと一た進み夕明朝を忘れしめる

瞳芯に煙く鱗

魚はー女

魚鉤のー糸

移年の交信の大綱を描りて



墓場

秋の夜の蔭影

瞬間の瞑想

獨り

随して喪心せる移民は

里郎墓場の雑音に随

陽にやけ

性にうゑ

墓場を眺めて

故郷の幻影を築りてある





憐りの念

見苦しき追憶の乱れに

今宵は聴きなれた自動車の馳走音も大儀

あの笑聲は儼然と知らずなり世界だ

憐れの薄明りか幽霊になつた

悲惨の怪物に壓搾された生活意欲が

理性の力を癒し始める

白美人の歩み灯が心の一角に明滅する



書は病み

書は病み

夜は蒼ざめて

憂鬱な表情の底に

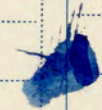
哀悼の激波が打ち返してゐる

是處がせせう笑ひで

讀責の難を揮ふか

私は墮落の淵で飯粒を拾ふ

一行あり





閑言路

星さへもなく

鳴さへも浅れず

砂利の山積みに赤灯が一つ

壊れた車道を

外廓にくるまへた私は闇を縫ふ

遠くで

屋上の電告電燈がたまらなく哀愁を喚ぶ





時は魔術師

凱施門の穴裡に這り込んだ女は  
結婚の夢に描いた幸福を舐めてゐる

儼には神經と愛と実がある

凱施門が色褪める頃

現生破つてやると影を去たりてみた

併し

時は偉大な魔術師であつた



美も憂も道徳も

生温い放浪の旅路に吐き棄ててしまつた

情念の想に~~染~~創うるる  
骨の生骨を携へて

あこどもなく

老の生骨を携へて廻つた

うこの皮肉な孤獨を

ああ

ちりちりつと肉を刺す神の

神の刺を  
鉗の刺車  
春の蒼空に耐え兼ねた



心は凍る

つんとすました夜

しつくり抱き合つた  
街燈と微風

波 波

浮いた雲の水鳥

茫然 眠気を露の  
インクにもたろしこ

煙草の輪に  
安寝を吐く

眼の前  
脂肪の香が流る

一つ、塊が影になつ

今宵も 今宵も

神様は不思議に  
高り遠く星を操つてゐる

未来永劫に  
天窓は圓りたろふ

私の心は  
蜘蛛に這ひ込めろと凍つてゐる



インキ壺

インキ壺は私の悩子を救つてくれた

瓶を倦み

運命の攝理に数く時

我が色に心を染めよと呼び掛け

その聲に耳を傾けしみると

理想の泉に湧き出た生命の力を感ずる

赤に

青に

忍みあしり情念をとかし

生れ出た新生命の原素を発見する

神と私の

我々の生活はインキ壺に静けさをつとめる



一條の光り

高空に突進する尖塔に

一條の照光は心圖に在る

友よ

親友よあけの闇を刺る光りの中に

前途の抱負を炎焼さやう心はなつか

昂奮は血となり肉となる

今

一つ数え二つ取り

星数秘の(希)想を脱ぐ衣がう常り捨て

敬虔な意志と

現実に純化された志を蘇生させよう

友人は

同じ路を照らす(星)光に

さあ来

靴の紐を堅く結んで往かう



瘡也たる労働者

人生 運命 神を

どうして突き詰めて考へやう

十七人の私を

ナホレオンの剣尖に躍つてゐたのだ

それが 今

暗黒な空へ落ちて

悪魔の線香を聴く

――お前は疲れてゐる

物質の力マにのまかで魂が磨きあつてゐる

叡智と情熱に襲はれた動物に

死ねばよい

呪わねたる放浪者と

焼印が捺してあるのか

確に雲が散るが浅い

併し



昔悩に喘ぎ乍らも

生きたゆきたり衝動が

大海の空場のやうに

惻然な人生の表面に熱を昇げてゐる

今日も亦

私は

春金の行進する街頭に大書する

丹瘡をたふす努力者よ

富士は汝の魂を思ふ良なり





かたつあり

地上の<sup>(聖)</sup>渾沌に縁草を乞ふかたつありを見た

判断 意志の超対に

官能 官能の唯一信頼を

不定なま觸角の鮮明さ

生命を賭す漂泊に

自ら拓く一本の軌道

自己の奥に澄徹する空腹な彷徨者

骨髄を残刻する過去の自影に

何の憾みある

私は、その蝸牛にありたつ



## 私と生活

つめあかて頭髮をかき上げなう  
 瘦えた笑顔を靴で傷つけると  
 埃と汗が溜息になる

靴は擦れあえ

瘦えたは歸る

汗ばんだしやりを脱ぎくつたり横になう

苜蓿の床板を睨まなう

女女、一えもなりとは



霜柱を建てる

恋の結末よ

冒険機を青天井に指向けり薄ら笑ひは

アイスクリーパーを選ば恋の価値を――

十銭銀貨で女を審判する

和ブラの裸牛で左室に歸つてゐる

猫も差吟をうたふに

私は愛憎を空虚に

心のあはれ

大地大空に植へたる一本の樹木に見え

力 真心 接吻が耳處に響く

おき 腹筋に熱湯が沸く 未だ

星の憤恨に闇を穿てる

併し淫氣を嫌ふ私ばかり

眠りに膝と夜を守る



夜の化粧に驚かして膨脹する  
女々々

著り獨身を礼視に導く

私は大道に踏ん張る努力に

人目の弱さを慰やす信仰もない

表情に生活苦を喰ひしほり

金の義氣のやうに露出した女の登壇に

理性の慢殺さぬやうする

やとよ

朝になると悔恨の雲が

霜柱を建てて太陽を禮拜する



波と新り

携うかびて 碎くる 波の 赤陽や

砂に 踏うかく まる

今日を 放浪の 瘡で 綴

数々の 思出を ~~綴~~り 合ふ

題めか ーリ 辱かしさを 克明に 刻す

一條の 追憶は

随うか落を 救ふ 落しさに 遷うかる

黄昏の 波枕に 女は 宿る ところ

十二 木じ

来り 朝 来り 夜

霜雪に 刺さる 倦怠の 悔み

静かに 今

散髪を 所請を 背髄に 挿す



椿

可  
し

花野藻里男

裏庭の<sup>隅</sup>に一本の椿を植へた

来り朝 来り朝

負<sup>ひ</sup>愈な霜<sup>しも</sup>休<sup>やす</sup>冷氣を刺<sup>さ</sup>戟した

雪<sup>ゆき</sup>と花の<sup>はな</sup>真境<sup>まがた</sup>に椿は春<sup>はる</sup>を<sup>も</sup>然<sup>しか</sup>れり

こんな乙女<sup>おんな</sup>みるに<sup>に</sup>新<sup>あらた</sup>か<sup>た</sup>なり





莒の骸子

負之の害に  
對しに  
まゐ  
た  
和  
け  
て

幸福の七が  
出ます

エ  
人  
エ  
人  
人  
人  
人  
人

懐中  
神探の  
間達  
ア  
作を

なめらかな指紋の上で駭子を振りまき

ほろ  
市出た  
幸福の  
セ  
カ  
ー

神様 12 峠 何 を 切 入 乙 ぬ ま す

分は幻想に  
至る  
かた  
乙

日に日に掌の條の荒むのを止す



## 断章

曇つた

雨！

雨！

山は雲です

外帯を引き被つて寒風を烈く

β

×

隣りの窓明りに

エトの音が更けろ

とあちりしへ

背伸びするところへす

×

椰子の傘に

冬々見覺めた

瞳の芯に霜が刺さる



自動車の御着きに

女友達の留一ツ

月夜の気配です

×

月夜を置つて

女の足に酔ひ

あめりかはつまらなり

×

女給の厚化粧に

冬は萎れてゐる

陽気に喰ふ若者人生

女の聲が霧に濡れた

庭木切つた冬の街燈に

外套の襟を揃へて急に

×

公園も色氣づいて来た

若葉の白さに足が隠れます

鬼ヶ島へ及ぶ足跡に

緑草が腰を折る木に



雀めの羽に

恋心―た春は魅へり

頭痛は東風は流れてる

×

深夜も告げられた時計に

夢をうたたへ

今語りあつた女は誰

×

一夜を語り明かす

童話のやうな嬉引きに

月は笠を冠つてゐる

×

猫のふあたり

赤い髪這つてゐる

今日の春のめくもり

×

姉さん

満園を着こよ

病子ついた春

そんな優い姉はなく



煙草うけあり

一杯の水

溜息の胸につまうた轆り

夜傘に耳を傾たえけり





砂

お前は砂 翔子

過ぎ雲の翹を持つ

お前は砂

俺はカクタスにならう

お前の種に生れしやう

俺を生育したもの

お前の塾で熟る

その抱擁だー力だ

墓場を枯れた中に

お前と俺

何のじやまも方う

始 あ 翹の曾に住ふ

お前と俺



## 川の垢

川の垢をほくりなぐり夜を更かし  
 追憶もあは

希望も後悔も

性慾もある

やくざで私のやうな人同は

岩に生じた苔見たりに

眼うつてみれば甘々人生だ

大陽が嵐を吹かすうと

海潮が増き膨ばうと

氣儘に川の垢をほくり落してみられし位

各々な生活は無り

息をすゝ事々一番無邪氣だか

暗く周囲を構へてゐても

川が伸びてやうに食つて中ける



## 自画像

私は殺さず木たまを氣を集めて  
自画像を創造する

歪める感覚を絞るやうにして  
生川を顔の真中に突き立てる

連續した苦の生脈を掘り下げて  
失敗した自画像を捨て去りて来る

今日も快復期の患者見たりに  
痲痺劑で夢を操りてゐる

未完の自画像に

痛み山崩れた記憶を

ああ 私の生活は細くく弱められ



ほう

理想の女が

あなも 美しう映写される

恍惚と霊感、思索の道を貫通する

~~たのしみ~~ 海





## 才二の巻

襦巻のなかから流れ出るやうに

女の囁きか

腰の辺りから這氣を誘ひ始めた

あつあつあう

後姿もあう！

凝眸とーこめれば

はっはっはあ

女方んち新上に戯れあはる

はっはっはあ

あ 頬や頭の上で飛ひ廻る

私は草草上から頸を傾けたあけろのも大儀で

はっはっはっはあ

大上段に揺り冠をさしたペン先をか

全身の情熱を暢快に活用しに割り込む

私はあえー！

春インクの裡に



## 白り十字架

牧場の端には白り十字架の行列が

野山は黒く焼け

茶福造に鬼が驅け追はうてゐる

碧室に微風は弄ぶる

炎陽が無聲の叫びを屋外に曝し

二人の労働者は黙念と汗ばんで坐つてゐる

あり 煙草が少しあるか

今年の冬も又地獄だぞ

もう 牛は賣り拂ふか

谷間の藁舎に草は~~枯~~縮していつた

牛は~~金~~鈍り眼で這い水に

併し

間斷なく破れ小舎から二つの溜息が苦痛を

嘗めて渡れる

突飛なる矛盾が

飢と牛の頭数を逆~~に~~評價線を創造する

都會に渡られた生活苦が牧場を押しまくる



牛乳は三日も放つて置けば腐りてしまふ、

三文の価値もなつ破山の谷に高價な牧人が

賣る

賣木め

取人の労働者は薪炭のやうなもので煙草を嗜  
人びる。

夏夜の悲劇に見えられた虫の聲

牛群の盛衰しりが<sup>（電報）</sup>睡眠を戦はした

無聲の悩子を運ぶ義憤な鉄道線路

荒原の鉄道線路が二人の視界に顕像した

尖鋭にゐるばかりまた毛食生活々

うとうとと眠りを驚撃した

其一步手前の餓死の火態が

絶え無能な労働者から<sup>（しん）</sup>揃ったミルカを置き

放しにさせ

牧場の端からは絶つが

白色の十字架が峰を雲に包みつけた。



秋の鉛筆

スカスカし夢に包まれた朝

私は詩集を床に横に

倚向きに伸び伸びと身を横たう

顔に覆われし頭髮の乱れを

秋陽は爽やかに詩集に縋を落した

ふと想いを散らすと

一匹の青蠅

ポイントと軸にたうて奇しき秋の舞を踊る

聴こえる頸條に鼻頭顔に

うささし

追拂つても復た来る

最後は光線9斑紋を並べた詩集の文字を撫

て廻る

腕9圓洲に

煙は忽ち惻いかなる



併し悉くてもある

蕉暗い床と壁の隅に進入して

瞬目

パル パル パル

背を擦り

翅を揺る

猛烈な呪文に獅子と女子

星の薄闇うかりか蜘蛛の巣網た

肥後一太郎を長足に分うませ急射する

小豆の意気

蜘蛛

疑子と蜘蛛の行動に鼓動を静め

織り白線を吐き始める

二本の後脚が連動する

蜘蛛の全身が麻痺の程に

白糸が境をなす

羽撃に向つて降り注ぐ

鉛が重なる織物の如く

蜘蛛は樂々と網渡りの妙技を披露する



足を曲げ  
手を振る

一歩の白あつた

生徒への訓

幾々煙の園子も多に緑子

強靱に操るふく木は断末魔に躍動する

除却の勢動鼓動

一分の秒一秒

空に云かむ行く無の空を云子





## 秋の悪戯

午後の暑気が軒下に落ちる

一線の蔭影が玻璃窓を突破する

軒柱の尖上さへ先頭の糸に並んだ

幼児の瞳孔は天井に反射して汗を弾く

る

眼を睨みつけ、輝の舞臺に

こそやうく

幼児は瞬きを重なる

ニユ ニユ 細い拳を窓枠に打ち振る

アバ ヲ ヲ 一

天井を揺めては下階へ老人を誘う

一寸 鼻頭を舐め

ハフタリ 新は消へ

憎悪と罵倒に性急な大女を揺る

老人の瞳孔が縮み、数々を湛えた眼

も揺る



室の四隅に灸をすする

老人の腰には

幼見やあてつて跳ねつてゝゝ

おどけた微笑に

キヤツ キヤツと拳を ~~打ち~~ つてゐる





見知りぬ娘

下宿屋の裏に黙々と膝を崩せば

草より地に胸をさすり行く魚のきこ音を聴

く

足音 虫音 水音

母屋の臺所にやさしい返事

あの若々しい聲は誰か

~~あ~~

私の瞳にはス々ニハイトかき書かれた

心は胸もなり

白美人の住む隣家からのじやんが

山を越へ谷を過ぐ

海を渡る

心は夢に似て胸もちや



秋の金

秋金はタノホを誘ふ

更田の萩野に夕空を散らす人

秋は長々と軀を依伏せし

草花に掌を感懐を埋めし

汗のじじふを寂寥に留息して蟻動を現く

茶色の薄子山の端に

懐御心へふしと詰め寄せる

タノホの一日

蟻にも生かあり

住家がある

秋金にも今宵は信念がみえ

今に星の中を鼓して日没を嘆息したる

秋は

黄の甘利のやうな月に抱ふ木

盡に語

移民の数を白鷺やう



無題

ああ ああーきゃーにーい

女は池の面にツリ込まれ

男の脇に手を挟さんて ~~抱~~ 抱か

夜は ~~車~~ 車中人影を吸ーて

妾は余り遊ーんて

花は女の横顔にくすぶうたけを今をやり

けーて



弟の鼻

凍りつく夜氣にふくと睡りを破られ

ああ また――

―― 鼻をかりゝゐる

肩を揺る木ると弟は定まつたに調へて抗す

―― 盗んだ また眠れつゝもみち

暫くたつと 復た寝返りをして雷にちる

―― 復た始まつた

急な寝違ひの上に我は直まつた弟は

凝眸と瞳を揺ゝゝ私を眺まつる

―― 女の時計だつた はつキリ用ゝゝゐる

―― はつ はつ はつ はつ はつ はつ はつ

―― 兄さんは僕を馬鹿にする

弟は頭を振る木々横にたり掛ける

俺自身だつた

目醒まつゝゐるつゝもりゝ其実はうづらうづら



うゝゝゝのた

和は教士と匠やうな筆の習得に

微苦笑を洩うし、然らず

和腕を組むと



弟と和

— 何<sup>なん</sup>も教へ<sup>し</sup>て理解出来<sup>し</sup>たんだ

ペンを握ったまゝ、弟は頭垂れ<sup>て</sup>涙ぐむ

和は額に手を当てて

描顔に<sup>顔</sup>線を流<sup>し</sup>がす

— 今晚はもう静か<sup>に</sup>す<sup>ま</sup>す

黙<sup>り</sup>て机首く弟の顔から

和はとつと描を向く





灼熱の郷

頬紅うめへ俯向つてゐる乙女に  
詩と溜息で生命を繋ぐ寂しさを  
詠ふ

私も灼熱の郷が好きで

焼けた木を砂岡に

裸體で影法師と渾身揺る

あなたへ頬を

あなたへ俯向つた儘で

あなたへ俯向つた儘に

脚で砂をうづつてゐるだろう



海之志

沈波

息をく心裁の教訓に

指頭をあて、時変する

変りか

微金に替をなれり来る運り

こころ

人知らず 女よ

小石の糸を垂れし海深を量る術に似て

には接する

執念に海の蒼さを晴めれば

我が夢の薄く破れ

沈に 掃きぬ 皺になる也



心に傳ふあり

只一つの電燈は志を<sup>は</sup>あきら

冬夜<sup>は</sup>しんしんと感傷を覚る

白き燈臺に境りを刻する魂は

五千坪の海を度る

愚かなる預りは電燈を消し

心の左けり上<sup>は</sup>聲をうんざく稿妻となす

り  
こり<sup>は</sup>行に<sup>は</sup>本

波濤にうある心、寂感

卓上に<sup>は</sup>腕を洗<sup>は</sup>ひ<sup>は</sup>夢を描く<sup>は</sup>



田園風景

緑の乳牛になつたアポロの草カサに

血の想をかき乱さるる田園の――

併し今朝

~~朝~~ワ裁橋に守る人

田舎

男性朝焼けに忙しう

荒野を徘徊する解牛の動き

家畜の聲をたかきと茅を満たし

金くの田園風景

赤銅色に頬骨を刺す土の健康に

数知れぬ果実と園果の夜が待つてゐる



秋

異国の秋は煙霞の田園に暮れ初め

生駒の夕伸も昨夕も湧木ぬ

泥<sup>どろ</sup>畦<sup>あぜ</sup>の痕木を味ふがよ

雲の無<sup>な</sup>つ夕空の何處に

故郷<sup>ふるさと</sup>のうめ秋の夜夢が隠さぬ<sup>あや</sup>夢

異風土の彼岸に

冷たくたつ左體験と

凄<sup>しみ</sup>脆<sup>はな</sup>の感慨が立す疎んでゐる

留<sup>とど</sup>ま<sup>る</sup>食卓<sup>しょくたく</sup>を護<sup>まも</sup>る

細々と一た煙りが

望<sup>のぞ</sup>海<sup>うみ</sup>心と~~秋~~集<sup>あつ</sup>焦<sup>しょう</sup>燥<sup>そう</sup>を巻き包んで

過去と現在に半ば掛けた

あゝ、怎うではなぬ、た望だに

从<sup>しん</sup>流<sup>りゅう</sup>の浪<sup>なみ</sup>惨<sup>さん</sup>な骨肉をけつり



秋風は朦朧として苦悶の唾液を嘔吐する

人生の悲哀は

異郷の田園に巣喰ふところ

斯の野に

自然の美 愛 憂 実 分

或は刻明に偉大であつても

一つの希望 平和 休息を齎す事

何の存在もなし

現代文明と性慾意識は

如く加減に田園を蹂躞する

春は十な街頭に

秋は荒涼の夕焼けに

高き人々 繁華に暮るべく



自然のうず

蹴は駆けこゝろ小供等の笑ふの裡に

二三匹の小犬が尾を振つて住すまく

玉鬘たまむすの敷に隠れ人だ聲々に

さあ さあと當惑れた春等の裾が

子供 こども 夷うちはを忘木さして

茶湯色り穂 ~~穂~~を空に揺さぶつてゐる

街の子供等を

人々

靴墨々剥けこゝろまづ左う

舞かすて野々迄来

十針 二十針 生涯

自然の ~~又~~裡には流る葉に驚つて

世那気な幸福 ~~幸福~~

土の香に泳つてゐる



夢の糸 失望

白雲は常緑樹の<sup>葉</sup>に垂木<sup>は</sup>籠めて

鳥が低く低く群<sup>上</sup>木<sup>上</sup>に

希望の糸をたぐつてたぐつて

飛び<sup>た</sup>群<sup>鳥</sup>を遠い地平線<sup>へ</sup>に投<sup>な</sup>げてる

る糸は

何處<sup>も</sup>うかほるぼろと流水<sup>も</sup>来<sup>る</sup>

放浪者<sup>の</sup>遠<sup>く</sup>うめき聲<sup>を</sup>をき<sup>け</sup>た

りも

かき<sup>な</sup>うパン<sup>と</sup>に<sup>泥</sup>に汚れた室<sup>の</sup>歎<sup>に</sup>

果<sup>て</sup>なき移民<sup>の</sup>惨<sup>な</sup>苦<sup>を</sup>越<sup>え</sup>させ<sup>る</sup>る<sup>日</sup>抱<sup>く</sup>

か

荒原の空に<sup>蒼</sup>蒼<sup>と</sup>た<sup>た</sup>を<sup>押</sup>して行く

轉<sup>回</sup>国<sup>を</sup>離<sup>れ</sup>た<sup>移</sup>民<sup>の</sup>群<sup>に</sup>

土<sup>は</sup>黒々と放浪<sup>の</sup>悲劇<sup>を</sup>展開<sup>させ</sup>

白雲 御愁<sup>が</sup>猥<sup>の</sup>物を形<sup>を</sup>描<sup>き</sup>あ<sup>う</sup>て往<sup>く</sup>



## 病院生活

病院の白壁にも～なされてゐる日に  
朝が續けざまに二回寝け出した

看護婦のエクボがすりよつて

置うは三日同寝してゐる馬鹿です

和の意識は

もろくもろくして  
朦朧と薬品にのまされてゐる



洗濯物にあふ

黄白の絹の寝台の下をくぐり

甚時目

私の瞳孔には

何の汚れもない

女の肉の赤 刺戟 興奮が

灼く如く燃へ盛った

変態であらうか

否 眼に見えぬ神の心の動きなりだ

神にうたえた心の衝動が

洗濯物の下に泳ぎ始める



## 夏の女

夏女はそかにお前を恋する

唄へ

はだかーさを太陽にそそげて

またー腰を揺るかし

位順に足音を伸ばして

夕陽に目醒める家ーさのあけに

桃の肌を流すおひ

俺は胡坐をかいて星を眺める



片恋

女の情愛が生生とした晴空の星になつた  
 頭部を打つて揺つて恋が川歸りする

おま　その次の一瞬

彼女が脱走した冷笑は心に徹し

恋の熱を何處ともなく運が流る

愛を消す

船は

海を渡り

山を越へ

異国の放浪によろめりた脚を運ぶ



夜明けの月

光に

白光の惹いた夜明けの月に立ち帰る

雲に散る木々の囁きに捨て去る

~~心は~~心は

薄り光りもたへたへに

形ばかりの残照を暮り日中に投げ出される

柘榴の奥に

飛沫に散れよ

飛沫



あま

冷たい酒の

栓

あま

糸の上に

飛沫

あま

上る



志を志す

瘦れた神経が酷烈して志の色を患者となす

楊民の子の孤獨生活の焦心は

氣筋本娼婦の傍に

絶望な川娘の夢に

恐怖に戰慄く青春が人衆に流れゆく

露草に幻は深さ

陽炎に衝動の烽火は昇る

とある

無情な国境に障害をえし

志の目射病患者か

おこどもなき放浪の旅路に

痛痒の志の魂を抱きしめて餓死を人とする



移子の子

我は心にもあらず

里侑も移子不憫

今宵

あかあかと輝く工野大は

二つカワ 二つカワ

砂足を造りつ木と

我が跡には幾つもの貝の光木り

心は

夕べの海にさうお木と

月を驚也

涼き流木を籠に似て

空並に慰めを運ぶのや

如何に我は移子

春を 雨を 余を 稲妻を

葉山子を知く



もうけに

~~わ~~ 冷たき草葉に悔まね

移民の子なす





負之

漢事介

自動車介

鶏介

夜介

和は新うのインク壺に身欠ありになつた

全性

總この進行が~~新~~負之を運来しゆく

大膽と無感覺に輝く

咄一の燈臺~~と~~掛り

和は田りまふやう

眩暈のするやうに~~極~~な回轉で馳走する

負之の裾に

和は~~子~~うさがつてゐる

行を  
おけなり



## 春の歎き

紫の峯に續く春の大名に  
 身の放浪を歎つたのだ

春は生はる白に耐へず

待つ遠く想ひに悔み乍ら

健忘と憂鬱と

禁慾の失望から

全身を振り落てる放浪の本性を露くする

あらあら

街の雑音を遁れ

無味乾燥な大陸の荒原を歩き回り

鉄獄の食卓に

悲嘆の逆者の巨懷に

水と——パンと酒に

人生の意味をつなぐ

地下道の生はる遠かに春を待た

春を歎く私に



青春生活は何處にある

遠く地なくも

夢の鐵門を越えて

生活破綻の藪を白鳥の先きに白鳥である



## 人生の歩み

冷徹した沈黙の基の方々に

泡立つ深淵の水珠は理想の運賃でもあつ

か

異貌な想像と豊麗な衆徴を各美に運ぶ

すゝめが人生の長つ旅路でもあつた

落葉の重積の下から翹翹をもたげやうとす  
るキノコは

強烈な一夜の嵐に動搖し蒼人でもあ

無理解な運命は寧ろ怯んで傲慢な牢獄の看守で

あつ

牢獄の巨人は常に斬り苦しみの斧を振り廻す

その黒影が人の群を迷はしめる

臆病で孤獨で

そして直心 賢く若者達に

赤い陽が地を



明暗の境に惑惑する月の輪に向つて  
沈黙と平和の糸を結ぶ  
人生の理想と現実の境を求めろ





海ノ士官

孟を

頼は報く

大陽に

潮に戦ふ

心は波濤の碧魂を敵いこみ

酒の泡を

海盜了了仕快を

右に左に傾ずる

海の士官は響を蹴りて

銀星を数つこみ

星の眼鏡

金の短剣

腰鞭り宵に

白の歯が浮つてゐる



## 童貞

誇りと契つを甘へた童貞を

かくくいと轉ぐす人生砂漠に

無數の星の片眼が

真正面から侮蔑を注ぐ心あり

豊饒な秋のころが

空をめぐりて肉迫す了詩歌の意氣が

ああ

秋の秋調さへ亂れがすにな



## 高橋の秋

荒草の無情を嘲けた山羊の泣き笑ふは  
如何に移民の心の魂をうちめすことか

あしにも等しう流浪生活の苦悩を

一枚の毛布にくるまりて流る往く

同胞達へ

明日も一人

今日も一人

一人一人落伍する

養老院のなり移民地へ

野明けの赤雲は花別の前兆か

我もその一人

汗と涙に

胸腰を痛めろと叫ぶ人と夜の眠りにかゝる



花思 い 己心ありき春

一草の蕾を心の奥に植へる

私は秘めたる志を遂げる

彼女は蒼空に春の觸手を感じ

白蛇の乳牙に聲をうめて震えろ

私は無邪氣な少女を愛する

志の蕾に

泉々と溢れる書夜を注ぎ

青春の純潔な契りをきりばぬ

人生の憂鬱を溶かす斯の解 想 には

私は軽蔑する肉の衝動を愛さ

書の足許に台倒 つ ったばかり

さあ

彼女は心の奥に静坐しゝゐる

特に青春の魅力に惑溺せんと欲する肉体

に